

日韓中の外言談話にみる発想と表現

—日本語と日本語教育のための基礎的研究—

沖 裕子¹・姜 錫祐²・趙 華敏³・西尾 純二⁴

キーワード：言語コミュニケーション，申出談話，依頼談話，対照談話論，日本語談話，
作例談話資料，談話構造，談話表現，社会文化的特徴，談話変種

Japanese cultural attitudes and language viewed through the contrastive study of Chinese, Japanese and Korean external speech: A fundamental study of Japanese discourse and JSL

Hiroko OKI, Suk-Woo KANG, Huamin ZHAO and Junji NISHIO

1. はじめに

コミュニケーションのための言語を，外言⁵と呼ぶ。外言は，談話によって遂行される。本論の目的は，日本語，韓国語，中国語の外言談話の特徴を記述しつつ，対照談話論的に日本語談話の特徴を明らかにすることにある。

「旅先で買った小品を同僚に渡す」「指導教員に推薦状を書いてもらう」という二つの場面は，日本，韓国，中国の大学社会において共通に見受けられる。しかしながら，たとえば買い求めた小品に見出す社会文化的価値はそれぞれ異なっており，ひいては小品を渡す行為の枠組み自体にも各国で異なりが認められる。本論では，こうした社会文化的異なりと，さらに言語のしくみそのものに由来する異なりとを反映して，日韓中それぞれの談話的特徴が認められることを指摘したい。本論のような対照談話論的方法をとることで，最終的には日本

¹ 信州大学人文学部教授。第1, 2, 6, 7, 8, 9章執筆。

² 韓国カトリック大東校東アジア言語文化学部教授。第3章執筆。

³ 北京大学外国語学院教授。第4章執筆。

⁴ 大阪府立大学人間社会学部准教授。第5章執筆。

⁵ 外言は，次のように定義される（国語教育研究所編1991『国語教育研究大辞典』明治図書，田近洵一執筆）。「外言とは，音声を伴って外に出されたことばのことで，外言語とも言う。人は，ほかの人とのかかわりの中でことばを話す。幼児が初めてものを言うようになる時のことを見ても，ことばはほかの人への働きかけとして発せられることがわかる。すなわち，ことばは何らかの意思を人に伝えるためのものなのである。外言とは，そのようなコミュニケーションのための社会的言語である。」また，外言は，思考のための道具としての内言に對置される概念である。

語談話の発想と表現の特徴の記述を目指すものである。現実世界の把握のしかたが発想にあたり、それに対応する言語選択の偏りかたのうちに表現的特徴が見出される（沖2009）。

なお、言語は変種や個人差を擁している。ここでは、論者4名の言語経歴を明らかにした上で、それぞれ内省による作例談話資料を作成した。作例談話資料を用いることにより、価値観の内省や判断とともに、談話構造や表現規範に対する内省や判断についても記述することをめざした。

また、論者4名の専門は、日本語学・日本語教育学である。第2言語としての日本語談話変種は、大なり小なり母語の干渉を受けている。音声、語彙、文法に誤りがなくとも、また、そうした誤りがなければ一層、無意識のうちに母語の影響を受けた談話は、接触場面において第2言語使用者に対する人格的誤解を生むようなコミュニケーション上の障害発生要因となることがある（ネウストプニー1982, 由井2005, 井上2005, 沖2007）。韓国、中国は日本語学習者人口も多く、また日本との関係も密接である。こうした言語問題を回避するためには、気づかれにくい言語差や気づかれにくい社会文化的差異を有したJSL（第2言語として使用される日本語）の日本語談話変種としての特徴を把握することが喫緊の課題であるといえよう。そのための基礎的研究として、まず、日本語母語話者の談話が有している特徴そのものを、談話論的に明らかにすることが必要である。今後の継続的かつ発展的な国際共同研究を期し、現段階⁶の試論として本論を位置づけたい。

2. 作例談話資料の性格と概要

まず、資料の性格と、資料作成の経緯について記しておきたい。

ここで示すのは、表現法調査を援用し、日本、韓国、中国において共通する具体的な場面における談話を、論者4名の内省によって作例した談話資料である。三つの社会文化において共通する場面を選ぶことで、当該場面における談話表現の異なりを比較対照することが可能となる。換言すれば、具体的な事実をいわば社会文化横断的に並べることにより、エティックなレベルにおいてそれらを比較対照することが可能になるのである。他方、当該場面と談話表現は、それぞれの社会文化における独自の体系中のひとつの要素あるいは局面として存在している。そのため、こうした各社会文化における当該場面と談話表現のイーミックな位置づけについても十分に考慮しなければ、正しい認識には至らないといえよう。対照研究の難しさは、エティックに行う対照において、各体系におけるイーミックな位置づけをふまえながら、その対照をいかに深く多角的に記述しえるかにあるといえよう⁷。

⁶ 本テーマに関係した共同研究を、沖裕子、姜錫祐は、両者が所属する大学間国際学術交流協定締結を契機として2000年度から不定期に開始した。研究費を申請するにあたり、沖と研究交流があり共通の関心を有していた趙華敏を加え、以上3名が2007年度より本テーマに即した共同研究を開始した。また、沖、姜とすでに研究交流があり、やはり共通の関心を有していた西尾純二が2008年度よりこれに加わった。

⁷ 外国語学習者は、学習対象言語と母語における同一場面をエティックに比較し、本来イーミックな価値づけのある母語談話表現を無意識に学習対象言語に移行させた言語使用を行いがちである。ここに、言語接触場面における言語問題発生の素地があるのだといえよう。そのため、本論のような対照研究は、こうした問題を解決するための基礎的研究としても必要となる。

さて、言語には変種や個人差がみられるが、本資料では論者4名の言語経歴を明らかにした上で、4名の個人語の内省資料を分析対象とする方針を採用した。つまりは、韓国語、中国語という他言語と対照させることによってこそ把握可能となるような日本語の性格に対して、分析の焦点を当てることを目的としている。韓国語、中国語、日本語内の変種的差異や個人差の問題については措き、それらを捨象しても得られるほどの言語的差異を記述することに重点を置くものである。種々の偏りは当然予想されるが、これらの補正ないし位置づけは、別の課題としたい。

念のため、母方言についても記しておきたい。ここで「日本語談話」と呼ぶときは、奈良県大和高田方言（西日本方言）を母語とする西尾と、長野県松本方言（東日本方言）を母語とする沖の、2名の内省資料を指している。また、韓国語（朝鮮語）、中国語にも当然ながら地域差があるが、ここでは、大韓民国忠清北道方言（忠清方言の一つ。忠清方言は、ソウル方言とともに中部方言に属する）を母語とする姜と、中華人民共和国天津方言（北京官話を含む中国北方方言に属する）を母語とする趙の内省を用いている。ここで「韓国語談話」「中国語談話」と呼ぶときは、これらを指している。また、社会方言に関しては男女差を有し、世代差がある可能性も否定できない。なお、4名とも大学教員であることから、この点の社会的属性は共通している。

使用コードは、共通語場面でのそれを対象にしたが、実態としてコードスイッチングが観察される場合にはそれも含めて内省した。また、韓国語、中国語談話については、資料作成者が直訳としての日本語を添えた。厳密な対訳はそもそも成立しないが、日本語の自然さを犠牲にしても直訳を原則としている。ちなみに、姜、趙は、日本で学位を取得していることから、言語共同体の一員としてJSLを今も使用する機会を有している。

先行研究には、談話の一部の特徴的要素に注目した計量的な対照社会言語学的研究や、語彙・語法に注目した意味論的対照研究がすでに多くあるが、まとまりのある半定型的談話全体を対象とした対照研究は管見では見出せなかった。本資料は、日本語談話が総体として有する特徴を、対照研究的に明らかにしようとする点に特徴がある。

談話は、言語記号そのものに対象をしぼったとしても、談話結節法、談話表現法、談話行動の3点を記述する必要がある（沖（印刷中）参照）。また、談話は、言語記号のみならず、当該共同体の社会文化が有している行動規範などの価値意識に支えられて、言語選択がなされている（沖2006、姜2007、2009、趙2007、西尾2008）。ここでは、こうした半定型的談話の談話構造および特徴的表現と社会文化的規範の解明を主目的としているため、個人の判断を十全に記述しうる作例談話による調査方法を採用したものである。当然のことながら、現実の自然談話の観察が必要な場合もあり、研究目的によって方法を選ぶ必要がある。

具体的な手順としては、研究合宿での検討事項をふまえ、研究代表者である沖が予備調査票を作成し、4名全員がこれに回答した。その結果をもとに、調査場面と記入方法を見出した。今回は、「旅先で買った小品を同僚に渡す（以後、これを指して申出談話と呼ぶ）」「指導教員に推薦状を書いてもらう（以後、これを指して依頼談話と呼ぶ）」という2場面にしぼり、場面の有する社会文化的異なりの記述を十分に行うよう調査項目に配慮し、調査票原案を作成した。その後、沖の内省資料と分析を記入した調査票を電子メールで送付し、それぞれが記入した。こうした手順をとったため、回答には、沖の記述と異なる点が特に記され

たり、また、共通点については沖の分析表現をそのまま借りて示すなどの箇所が本資料には含まれている。このため、沖資料を4者の最後に排列する。なお、本資料作成は、2009年9月から10月にかけて行った。

以下、韓国語変種、中国語変種、日本語変種1、日本語変種2の順に作例談話資料を示し、その後、第7、8、9章に分析結果をまとめたい。

3. 韓国語談話変種（韓国人男性大学教員）

3.1 記入者の言語経歴

1964年生まれ。1歳～15歳（忠清北道報恩郡），16歳～18歳（忠清北道清州市），19歳～20歳（ソウル），21歳～23歳（江原道麟蹄郡），24歳～25歳（ソウル），26歳～28歳（アメリカ合衆国），29歳～36歳（日本／東京，大阪），36歳～現在（ソウル近郊）。

3.2 申出談話について

○世話になった同僚へ、旅先で買った小さな贈り物を渡す。

自然な行為であり、日常経験する。こうした贈り物のことを、「선물（贈物）」と呼ぶ。

○B（目下）がA（目上）にお土産を渡す場合。BがAの研究室へ持参。Bは、記入者。相手：他学科の目上の教授。比較的親しい。個人的に月に1回程度食事をする。研究室は少し離れている。「선생님（先生）」と呼ぶ。

状況：別館のAの研究室を訪ねてお土産を渡す。訪ねる前に電話で在室かどうかと都合の確認をする。立ち話。

B: (노크) (ノック)

A: 네 ㄱ 들어오세요. (はい ㄱ お入りください)

B: 아이구! 얼굴 잊어버리겠네요. 잘 지내시죠? (わあー! もう顔も忘れそうですよ。お元気で過ごされてますよね?)

A: 그럼요, 잘 지내죠. B 선생은 어때요? (それは、もう。元気ですよ。B先生はどうですか。)

B: 글썄 뭐가 이렇게 바쁘지…… 시간이 너무 잘 가네요. (そうですね……何が忙しいんだか、時間が過ぎるのが早いですよ。)

A: 이쪽으로 앉아요. 차나 한잔하죠. (こちらにどうぞ。お茶でも、一杯しましょう。)

B: 아니예요. 바쁘시잖아요. (いえ、お忙しいじゃないですか。)

나도 지금 가 봐야 돼요. 그냥 이것만 드리고 가려고 왔어요. (僕も、もう、行かなきゃいけないんですよ。ただ、これだけお渡しして行こうと思って。)

A: 뭐예요 이게. (何ですか。これ。)

B: 별거 아닌데, 지난 주에 우리 과 학생들 인솔해서 샷포로에 갔다 왔는데, 초콜릿 하나 사왔어요. (たいした物じゃないんですが、先週、うちの学科の学生を引率して札幌に行ってきたんですけど、チョコレートの一つ買って来たんです。)

A: 정신없었을 텐데 뭐 이런걸 사왔어요. 고마워요. (忙しかったでしょうに、何、こんなものを買って来たんですか。ありがとう。)

- [B]: 갈게요. (それじゃあ, 帰りますね)
 A: 진짜 그냥 가려구요? (本当にただ行っちゃうんですか?)
 [B]: 예, 오늘은 좀 바빠서... (はい,今日はちょっと, 忙しくて...)
 A: 그래요. 그럼 오늘은 그냥 가고, 조만간 식사 한번 같이 해요. (そうですか. それじゃあ,今日はこれで. 近いうちに食事でも一回, 一緒にしましょうよ.)
 [B]: 그러죠. 나는 수요일, 금요일 저녁은 괜찮으니깐 편할 때 전화주세요. (そうしましょう. 僕は水曜日, 金曜日の夜は大丈夫だからご都合のいいときに電話ください.)
 A: 그래요. 그럼 내가 다시 연락할게요. (そうですね. それじゃあ, 僕がまた連絡します)
 [B]: 예 ~~ 갈게요 ~. (はい, じゃ, 帰りますね~.)
 A: 예 ~~ (はい~.)

B (目下)가 [A] (目上)にお土産を渡す場合. B가 [A]의研究室へ持参. [A]는, 記入者.

相手:一緒に仕事をしている他学科の目下の同僚. 比較的親しい.

状況:予告なしに研究室への訪問を受けて. 予告なしの訪問は普通である.

- B:(노크) (ノック)
 [A]: 네 / (はい.)
 B:(문을 열며) 바쁘신 거 아녜요? (ドアを開けて) (お忙しくないですか?)
 [A]: 아뇨 아뇨 괜찮아요. 들어와요. (いやいや, 大丈夫です. 入ってください.)
 앉으세요. 커피 한잔 드릴까요? (座ってください. コーヒー一杯入れましょうか)
 B: 아뇨, 괜찮아요. 밖에서 보니 연구실 불이 켜져 있어서 잠깐 들렀어요. (いえ, 大丈夫です. 外から見たら研究室の明かりが点いていたので, ちょっと寄ったんです.)
 (선물을 건네면서) 이거 드리고 가려고요. (お土産を渡しながら) (これをお渡しして行こうと思って.)
 [A]: 뭐예요 이게 (何ですか. これ.)
 B: 아~ 이거, 지난 번에 제주도에 갔다가 선생님 드리려고 사왔어요. (あー, これ, この間, 濟州島に行って, 先生に差し上げようと思って買って来たんです.)
 맛이 괜찮더라고요. (味が良かったんですよ.)
 [A]: 아이고 고맙습니다. 그런데 제주도는 뭐 하러 가셨어요? (わー, ありがとうございます. ところで, 濟州島は何しに行かれたんですか?)
 B: 그냥 가족끼리 놀러요. (ただ, 家族で遊びに, です)
 [A]: 와 ~ 부럽다. 그래서 재미있었어요? (わー, うらやましい. で, 楽しかったですか?)
 그건 그렇고 좀 들어오세요. 차 한잔 하고 가세요. (まあそれは, それとして, まず, 入ってください. お茶でも, 一杯飲んで行ってください)
 B: 아니에요. 바쁘신데 다음에 올게요. (いえ, お忙しいでしょうから, また来ます.)

A: 그래요. 그럼 다음에 천천히 얘기합시다. (そうですか。それじゃあ、次にゆっくり話しましょう)

B: 예 ~. (はい)

○贈り手が留意すると思われること

1. 訪問する前段階としては、渡すときの相手の都合を気にする。
2. その膳物が相手にとって迷惑になるかどうかなど、相手の負担に留意することがあまりない。自分の立場から品物を選ぶ。例えば、自分が気に入ったもの、美味しかったものなど、自分なら気に入ると考えたものを選ぶ傾向がある。
3. 自分のために時間を割いてくれたことについて、申し訳ないなどとの気持ちはない。

○贈り手の談話にみられる表現的特徴

- ①「先生に差し上げようと思って買ってきたんです」のように、自分が相手(受け手)を気遣っていることをはっきりと示すことが普通である。
- ②「바쁘신데 (お忙しいのに)」という表現が何回か出ているが、これは、実際に自分も相手も忙しいことが分かっているために現れるものである。親しい間ではあまり遠慮しないことが普通である。

○贈り物の受け手が留意すると思われること。

1. 品物自体については、ほとんど話題にならない。感謝の気持ちを相手への関心を示すことで表す。例えば、どこに何の目的で行ってきたのか、楽しかったかなど。
2. 感謝を表明しやすくなるので、その場で開けることもある。

○贈り物の受け手の談話にみられる表現的特徴

- ①「ありがとうございます」「すみません」に相当する形式的なことばは、日本語と比べると少ない。定型的なことばを選ぶより、「お茶でも飲んでいきませんか」「また食事でもしましょう」という誘いの表現によって、感謝を間接的に表す。
- ②日本では、後日、もらった物に対して「昨日はどうも」「先日はどうも」あるいは「美味しかった」「きれいだった」など、受け手が贈り手にお礼を言うという場面をよく目にするが、韓国では事後にお礼を言うことはほとんどない。お礼は贈り物を受け取ったその場で表すことで済ませることが多い。

○社会習慣的な贈り物について

韓国においては、こうした小品は「膳物」と呼ばれる。膳物とは、贈り物、相手に差し上げる物、という意味を有し、「祝賀膳物」「誕生日膳物」「感謝膳物」などの複合語を作る。

古い韓国の風習としては、訪問の際、膳物を持っていったとしても、その膳物に言及することなく、膳物は玄関の上がり口にさりげなく置いておく、というのが礼儀であった。現代でも、そのような習慣は少しではあるが残っているため、その贈り物の受け手も、膳物自体については、深く言及することは少ない。

旅行先からの比較的軽い膳物は、先述したように、自分が気に入ったもの、美味しかったものなど、自分なら気に入ると考えたものを選ぶ傾向がある。さらに、最近では、その贈り物がなかなか手に入らないものや身体にいいものだったりすると、「これは本当にいいものですけど」などのように贈り物のよさを強調したり、親しい間柄であれば、「これは本当に高いものなんだ」のように、価格について言及しながら渡すこともある。現代では、西洋の

習慣が生活の中に普通に組み込まれているので、膳物をもらったその場で開けることも多くなってきた。

しかしながら、膳物そのものについて談話上積極的に話題化することはなく、「訪問自体が目的」となることがある。膳物は、自分と周りのよりよい人間関係を形作るため、その過程としての「あいさつ」という役割が大きい。

例えば、何の用事がなくても韓国の研究者同士では、「話があるんだけど」「近くに来たから寄ってみました」「忙しくないなら、ちょっとお茶ください（お茶を飲みながら話でもしましょう）」のように、訪問自体を目的として訪ね合うことが普通である。相手に時間的余裕があって招き入れられれば、一般に、時間が許す限り歓談が続く。

3.3 依頼談話について

○礼儀正しい大学院の指導学生が、奨学金の推薦状作成を、指導教員に依頼する。Aは、指導教員である記入者。Bは、大学院の指導学生。

相手：大学院生修士課程2年生

状況：奨学金の推薦状を書いてほしい旨をメールで受けるか、携帯の文字メッセージ、あるいは研究室の電話で事前に伝えてから訪問するので、大体の依頼の内容を指導教員は把握している。

B：(노크) (ノック)

A：네 들어오세요. (はい。お入りください。)

B：(문을 열며) 교수님 ~ 안녕하세요. (ドアを開けて) (先生ー。こんにちは。)

A：어 ~ 그래 들어와. (おー、はい。入って。)

B：저 ~ 여기 추천서 양식요. (あの、これ、推薦書の様式です。)

A：그래 한번 줘봐. 언제까지라고 했지? (そう。まず、見せて。いつまでだって言ったっけ。)

B：다음 주 수요일까지요. (次の週の水曜日までです。)

A：너무 시간이 없구나. (ずいぶん、時間がないんだなあ。)

B：죄송해요, 바쁘신데. (すみません。お忙しいのに。)

A：그럼 다음 주 월요일까지 써 놓을 테니 찾으러 와. (それじゃあ、次の週の月曜日までに書いておくから取りに来て。)

B：월요일은 제가 학교에 안 오는데, 교수님 화요일 찾으러 오면 안될까요? (月曜日は私が学校に来ないんですけど、先生、火曜日に取りにきたらダメですか?)

A：그래 화요일도 괜찮아. (そう、火曜日でも大丈夫。)

B：몇 시가 괜찮으세요? (何時がよろしいでしょうか。)

A：오후 2 시에 수업이 끝나니까 그때쯤 와. (午後2時に授業が終わるのでそのくらいに来て。)

B：네 알았습니다. 교수님 감사합니다. 그럼 가 볼게요. (はい。わかりました。先生、ありがとうございました。それじゃあ、行きますね。)

A：그래 ~. (はい。い。)

B：(꾸벅 인사를 하며 문을 닫고 나간다.) (お辞儀をしながらドアを閉めて退室。)

○指導学生の態度や意識について。

1. 指導教員に対して申し訳ないとの気持ちがある。
2. 「月曜日は私が学校に来ないんですけど、先生、火曜日に取りにきたらダメですか？」のように、自分の都合を直接言い表すことが多い。

○指導学生の談話にみられる表現的特徴

最後のあいさつとして「よろしくお願ひします」に相当する形式的な表現を使うことが少ない。その代わり、「先生、ありがとうございます」に相当する表現を使う。

自分が恐縮していることを形式的に示す表現は少ない。例外として、「너무 시간이 없구나」という指導教員側にとって不利な依頼の事実に対しては、指導教員が感情を表明しているので、「죄송해요, 바쁘신데. (すみません。お忙しいのに。)」が現れている。

入退室の際も、「失礼します」「よろしくお願ひします」に相当するような、定型的なあいさつは現れにくい。

○指導教員が留意すると思われること。

1. 推薦状の作成に協力的な気持ちを表す。
2. もう少し時間的に余裕をもって依頼することを望む。
3. 期日までに間に合うよう対応する。

○指導教員の談話にみられる表現的特徴

指導教員が留意すると思われる1から3は、次のような言語選択に反映されている。まず、学生の用件がわかっているので、1の「協力的な気持ち」と、3の「期日を気にしている」ことが「그래 한번 꺾봐. 언제까지라고 했지? (そう。まず、見せて。いつまでだって言ったっけ。)、の表現に現れている。また、「너무 시간이 없구나. (ずいぶん、時間がないんだなあ。)」は、2の「時間的余裕を望む」表現である。

4. 中国語談話変種（中国人女性大学教員）

4.1 記入者言語経歴

1959年生まれ。0歳～20歳（天津市河東区）、20歳～22歳（東京都文京区）、22歳～現在（北京市海淀区）。この間、40歳～41歳（京都府）、45歳～46歳（東京都豊島区）。

4.2 申出談話について

○世話になった同僚へ、旅先で買った小さな贈り物を渡す。

自然な行為であり、日常経験する。「礼物」「礼品」と呼ぶ。

○B（目下）がA（目上）にお土産を渡す場合。BがAの研究室へ持参。Bは、記入者。相手：研究室が近い10ぐらい年上の女性教授。比較的親しい。研究分野は日本と関係がない。状況：同じ階にあるAの研究室を訪ねて渡す。立ち話。出張のお土産を渡す。仕事のことでよく相談にのってもらう。そのお礼の意味もある品物。相手も、そうであることは分かっている。

B：（ノック）

A：请进。（どうぞ）。

B：不打扰您吧。（お邪魔じゃないでしょうね。）

A：没关系。请进。请坐。（かまいません。どうぞ、お入りください。おかけくださ

い。)

Ⓑ: 不了。前几天我去日本出差, 买了个小礼物, 送给您。(いいえ。この間, わたしは日本へ出張して, ちょっとしたお土産を買いました。あなたにお贈りします。)

A: 太客气了。(とても気を遣いましたね。)

Ⓑ: 应该的。只是一点小意思。(当たり前のことです。ほんの気持ちです。)

A: 那, 谢谢了。日本东西就是精致, 颜色也柔和。(それはありがとうございます。日本のものは繊細で, 色も柔らかい感じですよ。)

Ⓑ: 您喜欢就好。这次安排太紧张了, 没有时间去买东西, 就在机场买了点小礼物。抱歉。(あなたが好きであればいいです。今度のスケジュールはとてもハードで, 買い物する時間がありませんでした。空港でちょっとしたお土産を買っただけです。すみません。)

A: 不用客气。(気を遣う必要がありません。)

Ⓑ: 您忙。我就不打扰了。(あなたはお忙しいので, これ以上お邪魔しません。)

A: 谢谢。有时间过来坐。(ありがとうございます。時間があつたらまた来てかけてください。)

Ⓑ: 好。告辞了。(はい。失礼します。)

○B (目下) が Ⓐ (目上) にお土産を渡す場合。B が Ⓐ の研究室へ持参。Ⓐ は, 記入者。

相手: 一緒に仕事をしていて, 比較的近い関係にある年下男性の同僚。

状況: 予告なしの訪問。立ち話。

B: (ノック)

Ⓐ: 请进。(どうぞ)。

B: ○老师, 可以打扰一下吗? (○先生, ちょっとお邪魔してもいいですか。)

Ⓐ: 当然可以了。请进。请坐。(もちろんいいですよ。どうぞ, お入りください。おかけください。)

B: 不了。前几天我去○○出差了。我知道○老师喜欢喝咖啡, 那里的咖啡比较有名, 就买了一点, 请您尝尝。(いいえ。先日, ○○へ出張しました。○先生はコーヒーを飲むのが好きだということを知っています。そこのコーヒーが有名なので, 少しばかり買ってきました。どうぞ, 召し上がってみてください。)

Ⓐ: 干嘛那么客气? (どうしてそんなに気を遣うの。)

B: 没有。只是一点小意思, 平时您给了我那么多帮助。谢谢。(いいえ。ほんの気持ちです。いつも配慮してくださっていますので, ありがとうございます。)

Ⓐ: 你太客气了, 感谢。以后千万不要买东西啊。(とんでもありません。どうも。これからはぜったいものを買わないようにね。)

B: 只是一点小意思。您忙, 我就不打扰了。(ほんの気持ちだけです。あなたはお忙しいので, これ以上お邪魔しません。)

Ⓐ: 谢谢你惦记。出差累了吧。好好休息休息。(気を遣っていただいて, ありがとう。出張で疲れたでしょう。よく休んでください。)

B: 好, 再见。(はい。それではさようなら。)

○贈り手が留意すると思われること。

1. 相手の邪魔にならない時間を選び、短時間で訪問を切り上げる。
2. 土産品が、相手の負担にならないように留意する。
3. お土産とともに、日ごろ世話になっていることへの感謝の気持ちを表す。
4. 自分のために貴重な時間を割いてくれたことを、申し訳なく思い、感謝する。

○贈り手の談話にみられる表現的特徴

贈り手が留意すると思われる態度1から4が、それぞれ次のような言語表現の選択につながっている。

①不打扰您吧。(お邪魔じゃないでしょうね。)

○老师，可以打扰一下吗？(○先生，ちょっとお邪魔してもいいですか。)

②前几天我去日本出差，买了个小礼物，送给您。(この間，わたしは日本へ出張して，ちょっとしたお土産を買いました。あなたにお贈りします。)

前几天我去○○出差了。我知道○老师喜欢喝咖啡，那里的咖啡比较有名，就买了一点，请您尝尝。(いいえ。先日，○○へ出張しました。○先生はコーヒーを飲むのが好きだということを知っています。そこのコーヒーが有名なので，少しばかり買ってきました。どうぞ，召し上がってみてください。)

只是一点小意思。(ほんの気持ちです。)

这次安排太紧张了，没有时间去买东西，就在机场买了点小礼物。抱歉。(今度のスケジュールはとてもハードで，買い物する時間がありませんでした。空港でちょっとしたお土産を買っただけです。すみません。)

③平时您给了我那么多帮助。谢谢。(いつも配慮してくださっていますので，ありがとうございます。)

④您忙。我就不打扰了。(あなたは忙しいので，これ以上お邪魔しません。)

○贈り物の受け手が留意すると思われること。

1. 相手の心遣いの気持ちを，よく受け止めるようにする。
2. 感謝と恐縮を表現する。
3. 品物を話題にする。
4. このように気を遣うようなことをしないように念を押す。

○贈り物の受け手の談話にみられる表現的特徴

贈り物の受け手が留意すると思われる態度1から4が、それぞれ次のような言語表現の選択につながっている。

①太客气了。(とても気を遣いましたね。)

干嘛那么客气？(どうしてそんなに気を遣うの。)

②那，谢谢了。(それはありがとう。)

你太客气了，感谢。(とんでもありません。どうも。)

③日本东西就是精致，颜色也柔和。(日本のものは繊細で，色も柔らかい感じです。)

④以后千万不要买东西啊。(これからはぜったいものを買わないようにね。)

○社会習慣的な贈り物について

祝日や特別な機会(例えば，出張とか)を選んで，日ごろ世話になった人や特別なことで世話をしてくれた人に感謝の気持ちを表すために贈り物を贈る。あるいは，何かのことで相

手に世話をしてほしい時に、贈り物を持って訪ねることは社会的に十分に自然な行為である。こうした小品は、「礼物（みやげ）」「礼品（みやげ）」と呼ばれている。

もらった側は、これに対して口頭で礼を述べるが、何かをその場で返す必要はない。社交的目的で他家を訪問し、飲食が伴う場合には、「礼物」「礼品」と呼ばれる品を持参することが一般的である。こうした手土産は、傷みやすい食物や果物であれば、門に入ったところで渡すのが普通だが、食べ物以外のものなら、座敷に通され、座ってしばらく話し合ってから渡すか、帰りの直前に渡すことが多い。世話になった目上や親戚に対して、季節の贈り物をする社会習慣があるが、これはそれなりに改まったものである。春節、中秋節に持参して挨拶するのがふつうである。送り手が言わない限り、送り手の前で贈り物を開けないのが習慣である。

贈り物をする側は、贈り物をするタイミングが重要である。何かのお礼をしたい、かといって、物々しくしたら受ける側は受け取りにくくなる。だから、出張や旅先で何かのお土産を買ってきて贈るのが受ける側の負担にならずに済む。受け手のことを大きく言い、送り手自身のことを小さく言うのが原則。送り手の表現的特徴の②③からそれが窺える。受け手は贈り物を褒め、受けるのを遠慮するのがふつうである。これは受け手の表現的特徴の③④から窺える。

4.3 依頼談話について

○礼儀正しい大学院の指導学生が、奨学金の推薦状作成を、指導教員に依頼する。Aは、指導教員である記入者。Bは、大学院の指導学生。

相手：博士課程にいる学生

状況：奨学金の推薦状を書いてほしい旨をメールで受けるか、事前に予告的な説明を受けていることが一般的である。アポイントメントのある時間に、教師の研究室を訪れる。

B：(ノック)

A：请进。(どうぞ。)

B：老师，打扰您，不好意思。(先生，お邪魔して，すみません。)

A：没关系。请坐。(いいえ。おかけください。)

B：不了。老师，奖学金的申请已经开始了。除提交论文外，还需要指导老师的推荐信。(いいえ。先生，奨学金の申請が始まりました。論文の提出を除いて，指導教師に推薦状を書いていただかなければなりません。)

A：我知道了。什么时候要呀？(わかりました。いつまでに必要ですか。)

B：下个星期一。(来週の月曜日です。)

A：时间够紧的。(時間的にちょっときついですね。)

B：老师这么忙，给您添麻烦，真是不好意思。(先生はこんなに忙しいのに，お手数をおかけして，恐縮です。)

A：没办法。有固定的格式吗？(仕方ないですね。決まった書式はありませんか。)

B：没有。您随便写就可以。(特にありません。先生がいいように書いて結構です。)

A：那好吧。你星期一上午9点左右来取吧。(いいでしょう。じゃあ，月曜日の9時ごろに取りに来てください。)

B：太感谢您了。那我星期一上午9点来取吧。(ありがとうございます。では，月曜日

の9時ごろに取りに来ます。)

A：好吧。(そうしてください。)

B：老师，再见。(先生，失礼します。)

○指導学生の態度や意識について。

1. 指導教員に依頼をすることを申し訳ないと思っている気持がある。
2. 目上の人に対して依頼をすることは、相手に負担をかけることであるという思いが、無意識裡にあるように思われる。
3. 先生が書きやすいよう、できるだけ的確に状況を伝えようと思っている。
4. 自分の都合を出さず、先生の判断に沿っていこうと思っている。

○指導学生の談話にみられる表現的特徴

指導学生が留意していると思われる態度や意識1から4は、次のような言語選択に反映されている。

上記の依頼談話は、依頼者の都合を述べていくのではなく、「老师这么忙，给您添麻烦，真是不好意思。(先生はこんなに忙しいのに、お手数をおかけして、恐縮です。)」というように指導教員に依頼をすることに対して申し訳ない気持を表す(1に関係)。肝心の用件内容を言語化せずに「您随便写就可以。(先生がいいように書いて結構です。)」というように相手に負担をかけるのを申し訳なく思い、教師が書きやすいようにする(上の2、3に関係がある)。さらに「太感谢您了。那我星期一上午9点来取吧。(ありがとうございます。では、月曜日の9時ごろに取りに来ます。)」とさらに、自分の都合を出さず、先生の判断に沿っていこうと思っている(4に関係)。

○指導教員が留意すると思われること。

1. 承諾している場合は、相手を安心させる。
2. 相手の希望と内容を正確に把握し、期日までに間に合う対応をすること。

○指導教員の談話にみられる表現的特徴

依頼を受ける側である指導教員の談話には、次のような特徴が認められる。

「我知道了。什么时候要呀? (わかりました。いつまでに必要ですか。)」

「有固定的格式吗? (決まった書式はありませんか。)」

「你星期一上午9点左右来取吧。(じゃあ、月曜日の9時ごろに取りに来てください。)」

「好吧。(そうしてください。)」

というように「はい、書きます。」などの直接的言語化は行っていないが、受諾を自明のこととして談話を推進する表現法が観察される。また、依頼内容や依頼方法に対して持たれた不満については、「时间够紧张的。(ちょっときついですね。)」などのように、提示された事実に向けて感情を表出する表現が採用されている。

依頼することは相手に迷惑をかけることだから、既に先生にお願いする時点で話しておいたことについてはやむを得ない理由があったとして、もう一度話すのが、もしかすると中国語母語話者が用いるストラテジーの一つかもしれない。例えば、「老师，奖学金的申请已经开始了。除提交论文外，还需要指导老师的推荐信。(先生，奨学金の申請が始まりました。論文の提出を除いて，指導教師に推薦状を書いていただかなければなりません。)」がその例である。本当は先生にお手数をかけたくなかったが、こういうやむをえない理由があったので、

依頼したのであることを述べている。

5. 日本語談話変種（日本人男性大学教員）

5.1 記入者の言語経歴

1971年生まれ。0歳～3歳（兵庫県尼崎市），3歳～19歳（奈良県大和高田市），19歳～22歳（三重県津市），22歳～24歳（奈良県大和高田市），24歳～27歳（大阪府箕面市），27歳～30歳（大阪府池田市），31歳～現在（大阪府堺市）。

5.2 申出談話について

○世話になった同僚へ，旅先で買った小さな贈り物を渡す。

同僚個人に直接渡すことはほとんどない。

○**B**（目下）が**A**（目上）にお土産を渡す場合。**B**は，記入者。

相手：コースの同僚全員（8人）。

状況：校務の忙しい時期に出張が入って帰ってきたときという状況。共同研究室に土産を置いて，コースのメーリングリストを用いて知らせる。以下の例の冒頭はメールの文章で，**A**は目上の同僚の一人。

みなさま

Bです。お世話になっております。

出張で北海道に行ってきました。

大事な時期に不在にして，ご迷惑をおかけしました。

共同研究室にお土産のホワイトチョコレートを置いておきました。

日持ちはしますが，開封後は2週間程度のうちに召し上がってください。

【以下，メール発信後，後日に廊下などで偶然**A**と出会った折】

A：（このメールに対しては特に返事はない。職場で同僚に廊下などで会ったとき）

Bさん，お土産いただきましたよ。おいしかった。

B：そうですか。よかったです。大したものじゃないですけど。

不在にしていってご迷惑をおかけしませんでしたか。

A：大丈夫，問題ないよ。出張のときはお互い様だからね。

B：そう言っていたいただけとありがたいです。（話題を変える）

B（目下）が**A**（目上）にお土産を渡す場合。**B**が**A**の研究室へ持参。**A**は，記入者。

相手：お世話になっている事務職員。研究推進の部署の事務員で，シンポジウム設営などの共同作業をすることもあり，かなり親しい。

状況：予め，トルコ旅行のお土産を研究室に持参することがメールで知らされている。

勤務時間終了後。

B：（ノック）

A: はい。

B: 失礼します。B (注: Bの名字) です。お元気ですかー。

A: あー、どーもどーも。おかげさんで。Bさん、トルコに行って来られたんですって? いーよなー。

B: 良かったですよー。それでこれ、はい、お土産です。

A: うわー、ありがとうございます。お菓子ですよ。おいしそー。

B: 甘いと思いますけど、お口に合うかなあ。

A: 甘いの好きやし大丈夫。あとでいただきますね。

B: よかった。

A: で、どんなところ回ってきたん?

B: もう色々行きましたよ。もちろん、カッパドキアとかも。あれはよかった。

A: そうかあ、リフレッシュできたんとちゃう? ご飯もおいしかった?

B: うん。でも、ちょっと食あたりしてお腹がおかしくなった。ほんで、体重が3キロも落ちたんですよ (笑)。

A: ええ! ほんまに!? 大丈夫?

B: 大丈夫, 大丈夫。3日ぐらいで体重, 2キロ戻ったから (笑)。

A: そうなんや。でも大変やったなあ。

B: 大丈夫ですよ。ほんまに。このお土産はちゃんとしたところで買ったから、食あたりにはならないと思います (笑)。

A: (笑)。じゃ、安心ですね。学生たちと遠慮なくいただきます。いつもすみませんね。

B: いえいえ。お忙しいところお邪魔しました。また、(事務の) 部屋にも寄ってくださいね。

A: ありがとうございます。

B: それじゃ、失礼します。(立ち上がって退室しようとする)

A: はいはい。ほんまに、わざわざありがとうございます。 (こちらもち立ち上がってドアまで見送る)。

○贈り手が留意すると思われること。

1. メールの文章が押し付けがましくならないようにする。
2. メールの文章が長くなりすぎないようにする。
3. 共同研究室に置いておくので、日持ちする品を選ぶ。
4. お土産は話題になる程度で、受け取ることが大きな負担にならないような品を選ぶ。
5. 贈り手自ら、受け手に土産品の感想を聞かないようにする。
6. 事務員の場合は、事前に渡す時間を伝えておく、勤務時間が終わってから渡すという時間への配慮がある。
7. お土産を介して、会話を楽しくするために、旅行のエピソードを語る。単に、普段から世話になっていることや、品を贈り相手が借りを作ることへの負担に対する配慮だけでなく、交感的なコミュニケーションを行うことで、関係強化を狙っていると思われる。

○贈り手の談話にみられる表現的特徴

- ①冒頭で「Bです」と自ら名乗る。これはメールでのみとる形態。
- ②「お世話になっております」は、メールに特有のあいさつ文。
- ③「お土産」という語彙を使用しない。
- ④目下から目上に贈るケースでは、普通体と丁寧体とが混在している。基本的には目上
が普通体になってから目下が普通体を用いる。ただし、Aは職務上は目下だがBより
も年上である。
- ⑤目下から目上に贈るケースでは、標準語スタイルをあまり用いない。

○贈り物の受け手が留意すると思われること。

1. お土産を受け取った後日、なるべく早くお礼のことばを述べる。
2. 研究室を訪ねるなどの改まったお礼ではなく、会議や廊下などで日常的な会話の中
で話題にしてお礼を述べる。
3. お土産に対して、プラス評価のことばを送り手に述べる。
4. お土産を介して、交感的なコミュニケーションをもくろむ場合は、会話がはずむよ
うに心がける。そのために、言語使用もいくぶんカジュアルなスタイルで行う。
5. わざわざ研究室に来てもらった場合は、言語使用はカジュアルであっても、きちんと
ドアのところまで贈り手をお送りする。

○贈り物の受け手の談話にみられる表現的特徴

- ①やや声を大きくするなど、喜びや驚きの感情を強めに表現する。
- ②土産の品を話題のきっかけにして、旅先の話を送り手から引き出して、短時間の雑談
をするように仕向ける。
- ③「ありがとうございました」などのお礼のことばを述べる。
- ④個人的に受け取った贈り物ならば、「気を遣ってもらってすみません」など、相手へ
の負担をかけたことへの謝罪の表現を挿入する。
- ⑤多少の遠慮や品を受け取るという負担を負う姿勢を見せながらも、「遠慮なくいただ
きます」と述べて、受け取りを負担に感じないということを言語的に表現する。

○社会習慣的な贈り物について

現在の職場では、旅先で時間がなかったり、荷物が多かったりする場合は、土産を買い求
めることもない。個人的な贈り物のやりとりも、めったにない。ただ、海外や遠方への出張、
長期の出張の場合は、お土産を持ち帰る頻度は高くなる。プライベートで長期の旅行に出た
ような場合であっても、同僚にお土産を持ち帰ることが多いように感じられる。

このような状況から、次のような目的でお土産の授受を行っているように考える。

- (1)海外旅行などでは贈り手が自分の楽しみを同僚に分かつような目的
- (2)同僚たちの中で「自分だけがいい思いをしてきた」という形を回避する目的
- (3)送り手が職場で不在のために、仕事に支障をきたした(かもしれない)ことに対する
お詫びの気持ちを表出する目的

このうち、(1)や(2)を目的とするようなお土産の贈答は、職場社会のなかでは習慣性が低い
ものと考えられ、(3)を目的とするお土産は、同僚個々人によっては恒常的である。同僚個人
間での贈り物の交換は、恒常的でも義務的でもなくなりつつある。職場のなかでも、個人的
なお土産のやり取りの有無は、贈り手と受け手との関係の親密度によって決まってくるよう

に感じられる。個人的なお土産の授受は、次のような目的があるように思われる。

(4)贈り物を通して、交感的なコミュニケーションを行い、関係の維持強化をする目的
 このような状況は、職場集団によって異なっているように思われる。以前の職場では、出張後に同僚などにお土産を渡すことは恒常的であった。また、教員間でも個人的な親密度に応じてではなく、職場の習慣としてお土産の受け渡しがあった。

5.3 依頼談話について

○礼儀正しい大学院の指導学生が、奨学金の推薦状作成を、指導教員に依頼する。[A]は、指導教員である記入者。Bは、大学院の指導学生。

相手：博士後期課程の大学院学生。女性（留学生）。

状況：Aの職場では、大学院生が普段から教員の研究室で研究する習慣がある。このため、Aは事前に特段の連絡を受けているわけではない。研究室は、学生が研究をするスペースと、Aが仕事をするスペースとがパーテーションなどで区切られている。

B：(Aの仕事スペースを覗きこんで) 先生。あの一、すみません。

[A]：はい（振り返ってBを見る）。

B：ちょっとお願いがあるんですけど。

[A]：何ですか（立ち上がってBに歩み寄り、学生の研究スペースに移動）。

B：はい。先生、あの一ちょっと奨学金の申請をしようと思ひまして…。推薦状を書いていただきたいんですけど（推薦状をAに渡す）。

[A]：あ一。推薦状ね。（推薦状をBから受け取る。）どこの？

B：×××財団のです。

[A]：ふーん。ちょっと聞いたことはないですね。了解です。その奨学金の設立趣旨とかが書いてある書類、持ってる？ それを参考にして書きますんで。

B：あ、はい。あります。（クリアファイルの中の書類を探しながら）えーっと、これです。

(Aに書類を渡す。)

[A]：はい。じゃあ、書いときますね。いつまでかな？（Bから書類を受け取る。）

B：○月△日までです。

[A]：そですか。…じゃあ、来週の火曜日は授業があるよね。そのときに取りに来られる？

B：はい。分かりました。先生、お忙しいところすみません。

[A]：いえいえ。採用されたらいいですね。

B：そうですね。

[A]：はい。それじゃあ書いときます。（自分の仕事スペースに戻る。）

B：よろしくお願ひします。

[A]：はい。

○指導学生の態度や意識について。

指導学生は教員の研究室に通いつめているため、指導教員が多忙であることをよく知っている。そのため、権利として推薦状の作成を依頼できることも分かっているいっぽうで、推薦状の作成を依頼することに申し訳なさを感じている。

また、研究スペースから教員の仕事スペースに入ることには、教員の業務を邪魔しないように慎重である。

○指導学生の談話にみられる表現的特徴

- ①教員に依頼行動をするにあたって、依頼行動に至るまでの段階が細かく発話のターンに細分化される。まず、注意喚起の呼びかけがあり、次に詫び表現を前置きとして依頼があることだけが告げられる。その次に事情を説明した上での具体的な依頼内容が表現される。
- ②Bは推薦書作成が、自分の権利であることが分かっているが、「お忙しいところすみません」と言って、Aの心理的負担を軽減しようとしている。
- ③注意喚起、呼びかけの際に「先生」という役職名称を使用することが多い。Bは留学生であるが、母語の影響だろうか。また、大阪では、教員に対して、「先生」という役職名称で呼びかける頻度が多いかもしれない。この点、地域差を感じることもある。

○指導教員が留意と思われること。

1. 推薦状を書いてもらうのは学生の権利なので、その要求に快諾の態度を見せる。
2. 必要な情報を端的にBに問いかけ、用件をシンプルに処理するようにする。
3. 学生の奨学金獲得に、協力的な姿勢を見せる。

○指導教員の談話にみられる表現的特徴

- ①Bが申し訳なさそうに話しかけてきた時点で、立ち上がり、話を聞く体勢であることを示す。
- ②用件が分かった時点で、普通体や方言を織り交ぜ心理的に接近し、要求に応える姿勢を見せる。丁寧体で通すと、心理的に突き放してしまうことになることを危惧する。
- ③詳しい資料の要求や、「採用されたらいいね」といった発話によって、奨学金の申請に協力的であることを示す。
- ⑤長時間の接触を避けるために、用件が終わるとその場を離れる。

6. 日本語談話変種（日本人女性大学教員）

6.1 記入者の言語経歴

1955年生まれ。1歳～18歳（長野県松本市）、18歳～27歳（東京都杉並区、世田谷区）、27歳～31歳（和歌山県海南市）、31歳～38歳（奈良県奈良市）、38歳～現在（長野県松本市）。

6.2 申出談話について

○世話になった同僚へ、旅先で買った小さな贈り物（「土産・お土産」と呼ぶ）を渡す。

自然な行為であり、日常経験する。

○**[B]**（目下）がA（目上）にお土産を渡す場合。**[B]**がAの研究室へ持参。**[B]**は、記入者。相手：研究室が近い目上の男性教授。比較的親しい。

状況：同じ階にあるAの研究室を訪ねて渡す。立ち話。出張のお土産を渡す。世話になったことがあったため、そのお礼の意味もある品物。相手も、そうであることは分かっている。

[B]: (ノック)

A：どうぞ。

Ⓔ：失礼します。

お忙しいところすみません。

ちょっとお邪魔してよろしいでしょうか。

A：どうぞ，どうぞ。

おかけください。

Ⓔ：あ，ありがとうございます。

お忙しいと思いますので，これで（注：立ったままで）。

あのう，10日ばかり中国に行っていたんですが，とってもきれいな絵葉書をみかけたので，お届けしようと思ひまして。

A：へえ。それはありがとう。あけていいですか。

Ⓔ：どうぞ。

A：やあ，きれいですね。伝統家屋ですね。こういうところへも行かれたんですか。

Ⓔ：いえ，ほとんど仕事でカンヅメ状態だったので，今回は，もう，どこにも行けなかったんです。大学でつけたささやかな絵葉書ですみません。久しぶりだったんですが，大分かわっていてびっくりしました。

A：中国も，もうすぐオリンピックでたいへんでしょう。

Ⓔ：ええ。鳥の巣は，空港までの道の脇にあつてタクシーから見えました。だいたい出来上がつてきていて，現代的なきれいな建物でした。先生も，機会があれば，ぜひお出かけになってみてください。

A：ああ，そうですね。でも，仕事がうまくいったようで，よかったですね。

Ⓔ：はい，おかげさまで。

お忙しいところ，お邪魔いたしました。

A：わざわざすみませんでした。

Ⓔ：いえ。

失礼いたします。

○B（目下）がⒶ（目上）にお土産を渡す場合。BがⒶの研究室へ持参。Ⓐは，記入者。

相手：一緒に仕事をしていて，比較的近い関係にある年下男性の同僚。

状況：研究室への訪問を受けて。予告なしの訪問は普通である。

（Ⓐの研究室のドアが開けてある。）

B：あ，すみません，Bですが。

Ⓐ：あ，はい，どうぞ。

B：あのう，実は，〇〇の仕事で，今夏×××へ行つてまして。

Ⓐ：ああ，そうですね。

おたいへんだったでしょうけれど，よかったですね。

どちらへいらしていたんですか。

B：△△△がおもでしたね。

これ，そこで買ってきたものなんです。

Ⓐ：まあ，ご丁寧に，ありがとうございます。

どうぞ、あのう、お気遣いなく。

ふうん。何でしょう。めずらしいですね。

B：ええ。そこの塩を詰めて土産に売っていたんです。△△△は塩が有名なんです。ちょっと面白いかな、と思って。

A：ああ、そうですか。

わざわざ、申し訳ありません。

パッケージがすっきりしていて、本当にきれいですねえ。

B：つまらないもので、なんです。

A：お忙しいのに、お気遣いいただいて。

飾って楽しませていただきます。

B：や、お忙しいところ、失礼しました。

A：あ、わざわざありがとうございました。

B：どうも。失礼します。

A：お疲れの出ませんように。

B：ありがとうございます。それじゃ。

○贈り手が留意すると思われること。

1. 相手の邪魔にならない時間を選び、短時間で訪問を切り上げる。
2. 土産品が、相手の負担にならないように留意する。
3. お土産とともに、その折の簡単な近況報告をすることで相手に親しみと敬意を払う。
4. 自分のために貴重な時間を割いてくれたことを、申し訳なく思い、感謝する。

○贈り手の談話にみられる表現的特徴

贈り手が留意すると思われる態度1から4が、それぞれ次のような言語表現の選択につながっている。

①ちょっとお邪魔してよろしいでしょうか。

お忙しいと思いますので、これで（注：立ったままで）。

②大学でみつけたささやかな絵葉書ですみません。

つまらないもので、なんです。

③あのう、実は、〇〇の仕事で、今夏×××へ行ってまして。／△△△がおもでしたね。／そこの塩を詰めて土産に売っていたんです。△△△は塩が有名なんです。

あのう、10日ばかり中国に行っていたんですが、／いえ、ほとんど仕事でカンヅメ状態だったので、今回は、もう、どこにも行けなかったんです。

④失礼します。

お忙しいところすみません。

お忙しいところ、失礼しました。

○贈り物の受け手が留意すると思われること。

1. 相手の心遣いの気持ちを、よく受け止めるようにする。
2. 感謝と恐縮を表現する。
3. 品物を話題にしつつ、簡単に相手の近況を尋ね、気遣う。
4. 訪問自体が目的のような場合には、その場であけて、話の糸口とすることもあ

○贈り物の受け手の談話にみられる表現的特徴

贈り物の受け手が留意すると思われる態度1から4は、この申出談話の受け手の受話として選択された表現のなかに、それぞれ複合的にみられる。

○社会習慣的な贈り物について

普段世話になっている職場社会等の人に、旅先で求めた小品を感謝をこめて渡すことは、今日では頻繁にまた常にあるとは言えないが、社会的に十分に自然な行為である。こうした小品は、「土産（みやげ）」「お土産（おみやげ）」と呼ばれている。相手の負担にならないように渡す。もらった側は、これに対して口頭で礼を述べるが、何かをその場で返す必要はない。社交的目的で他家を訪問し、飲食が伴う場合には、「手土産（てみやげ）」と呼ばれる品を持参することが一般的である。こうした手土産は、座敷に通されてから、まず、招待に対する礼の挨拶とともに、主（あるじ）に渡す。畳の部屋であれば、主客が正座した状態で口上を述べる。手土産が傷みやすい食物であれば、その旨を伝えて玄関で渡してから、靴を脱いであがる。また、世話になった目上や親戚に対して、季節の贈り物をする社会習慣があるが、これはそれなりに改まったものである。夏は「お中元（おちゅうげん）」、冬は「お歳暮（おせいぼ）」と呼ばれる。持参して挨拶するのが丁寧であるが、今日では宅配便で送ることも多い。祝儀、不祝儀の際の贈り物については割愛する。

6.3 依頼談話について

○礼儀正しい大学院の指導学生が、奨学金の推薦状作成を、指導教員に依頼する。[A]は、指導教員である記入者。Bは、大学院の指導学生。

相手：大学院修士課程2年生。

状況：奨学金の推薦状を書いてほしい旨をメールで受けるか、事前に予告的な説明を受けていることが一般的である。アポイントメントのある時間に、大学院生が研究室を訪れる。

[A]の研究室のドアが開けてある。

B：失礼します。

[A]：はい、どうぞ。

B：あのう、お願いしていた奨学金のことなんですが。

[A]：ああ、そうでしたね。お掛け下さい。

B：これですが（書類を見せる）、よろしく願いいたします。

[A]：はい。ちょっと説明していただけますか。

B：はい。ええと。授業料免除を受けたいと思っているのですが、ここに先生の推薦状が必要だということでした。

[A]：ああ、そうですか。いつまでですか。

B：あのう、掲示から締め切りまであまり時間がなくて、来週水曜日までということだそうです。

[A]：あらあ。ずいぶん短い時間ですね。

B：すみません。お忙しいところ。

[A]：はい、分かりました。では、来週月曜日の授業が終わったあと取りに来ていただけますか。

B：大丈夫です。よろしくお願いします。

A：はい。分かりました。

B：ありがとうございました。失礼します。

○指導学生の態度や意識について

1. 指導教員に依頼をすることを申し訳ないと思っている気持がある。
2. 目上の人に対して依頼をすることは、相手に負担をかけることであるという思いが、無意識裡にあるように思われる。
3. 先生が書きやすいよう、必要な資料はすべて整え、できるだけ確に状況を伝えようと思っている。
4. 自分の都合を出さず、先生の判断に沿っていこうと思っている。

○指導学生の談話にみられる表現的特徴

指導学生が留意していると思われる態度や意識 1 から 4 は、次のような言語選択に反映されている。

上記の依頼談話は、依頼者の都合を述べていくのではなく、「あのう、お願いしていた奨学金のことなんですが。」というような「言いさし文」を用いて、肝心の用件内容を言語化せずに伝えようとする表現法を採用している（4 に関係）。また、「ええと。授業料免除を受けたいと思っているのですが、ここに先生の推薦状が必要だということでした。」というように伝聞表現を用いて事実を伝え、その結果何が必要とされているかの判断は相手に委ねる表現法を採用している（2, 4 に関係）。さらに、「すみません。お忙しいところ。」というように、相手に迷惑をかける行為であることを詫げる表現法を採用している（1, 2 に関係）。また、「推薦状を書いてください」というような依頼内容を直接に言語化している表現はなく、「これですが（書類を見せる）、よろしくお願いします。」など、間接的に伝える表現に終始していることも特徴である（3, 4 に関係）。

○指導教員が留意と思われること

1. 承諾している場合は、快諾の態度が感じられるようにし、相手を安心させる。
2. 相手の希望と内容を正確に把握し、期日までに間に合う対応をする。

○指導教員の談話にみられる表現的特徴

依頼を受ける側である指導教員の談話には、次のような特徴が認められる。

依頼内容を受諾することについて、「分かりました、書きます。」などの直接的言語化は行っていない。依頼内容を受ける場合には、「はい」などの簡単な応答詞で受け、むしろ受諾を自明のこととして談話を推進する表現法が観察される。また、「ちょっと説明していただけますか。」「いつまでですか。」など、被依頼者にとって不明であり、かつ被依頼行為を遂行するために必要な情報について質問をし、その質問自体が展開していくことで受諾していることが示されている。1 は、談話全体の様々なレベルで感じられ、一つの直接的な文表現等で表されているわけではない。また、依頼内容や依頼方法に対して持たれた不満については、「あらあ。ずいぶん短い時間ですね。」などのように、提示された事実に向けて感情を表出する表現が採用されている。

7. 日韓中の申出談話にみる発想と表現

以上、韓国語、中国語、日本語の作例談話資料を対照すると、次のことが指摘できる。

まず、「旅先で買った小品を同僚に渡す」談話については、小品の価値づけが韓国、中国、日本で異なっていることが特徴的である。また、そのことは、コミュニケーションの様態や、コミュニケーション行為自体の価値づけとも密接に関係している。以下、韓国、中国、日本の申出談話にみる発想と表現を比較し、日本語談話の特徴を観察したい。

韓国においては、こうした小品は「膳物」と呼ばれる。膳物とは、贈り物、相手に差し上げる物、という意味を有し、「祝賀膳物」「誕生日膳物」「感謝膳物」などの複合語を作る。韓国の古い習慣としては、訪問の際に膳物を持っていったとしても、それに言及することなく、玄関の上り口にさりげなく置いておくことが礼儀であった。したがって、膳物の受け手も、膳物自体について、深く言及することがない。このことは、韓国社会における他者とのコミュニケーションにおいて、「訪問自体が目的」となることが普通であることと密接に関係していると言えよう。「訪問自体が目的」であるという認識をしている話し手と受け手の双方においては、言語コミュニケーションの焦点はまさに「訪問」そのものにあるため、渡された膳物自体が話の糸口の役目を果たすことにはなりにくい。また、「訪問自体が目的」という共通認識があるためか、相手の都合は気にするが、自分のために時間を割いてくれたことについて申し訳ないなどとの気持ちがない⁸。膳物の品は自分なら気に入ると考えたものを選び、自分が相手を気遣っていることをはっきり示すことが普通である。(本段落は、姜執筆部分について要約加筆。)

中国においては、こうした小品は「礼物」「礼品」と呼ばれる。「礼物」「礼品」は、現実には相手に世話になった場合のお礼としての具体的価値を有するだけでなく、何かのことでこれから相手に世話をしてもらいたい場合の贈り物としても持参すべきものであると社会文化的に認識されていることが特徴的である。この点で、贈り物をするタイミングが重要となる。社交的目的で他家を訪問した場合の礼物、礼品は、座ってしばらくしてから渡すか、帰りの直前に渡されることが多い。また、受け手の行為について大きく言い、送り手の気遣いについては小さく言うことが、一般的な礼儀である。(以上、趙執筆部分について要約加筆。)

日本においては、旅先でその土地の産物を入手したり、他家からめずらしい到来物があつた場合などに、近隣に「裾分け(すそわけ)」「お裾分け」をするコミュニケーション様式が

⁸ 談話生成に伴う心理にも社会文化的差異があることを、三宅(1994)は日英対照研究において社会言語学的に実証している。

⁹ 日本社会におけるこうした「おすそわけ」の習慣と精神文化について、多田(1972)は、西洋社会との異なりを指摘している。

¹⁰ 『日本語大辞典』(小学館)の「土産」の語釈は次の通り。「①遠隔地の産物などを送られた、あるいは入手した時に、近隣の者に裾分けすること。また、その品物。②旅先・外出先で求めて、家に持ち帰る品。いえずと。つと。③他人の家を訪問する時に持参する贈り物。手みやげ。つと。また、折りにふれて身近の人に贈り物をするともいう。④「みやげがね(土産金)の略。」

ある⁹。相手に贈るために旅先で求めた品そのものや、訪問の際に携えていく小品を、「土産(みやげ)¹⁰」「お土産」と呼ぶ。旅先で土産を求めそれを同僚等に贈ることは、現代では廃れてきているとはいえ社会文化的に一般的な習慣である。土産は、しかしながら、世話になったことの具体的な対価として相手に贈られるものではない。日本語のコミュニケーションにおいて重要なのは、相手の存在を心に留めていることである。また、その心を相手と共有するコミュニケーションが推進されることが求められる。そうした気遣いを象徴する一つの表現が、土産なのである。土産には、贈り手が自分の楽しみを同僚に分かつような目的がある(西尾)と述べられることも、こうした日本語コミュニケーションの特徴を反映した分析である。心が共有されるためには、贈り手と受け手の双方が共振的コミュニケーションに向けて協働することが必要となる。つまりは、土産の受け手は自分のことを心に留めてくれた贈り手の心情を思いやり、品選びをするときの相手の状況や気持ちに、受け手自身の気持ちを重ねながらそれを受ける態度が重要になるのである。こうした心的態度が社会的慣習(文化)としてあることから、土産自体が話の糸口となり、談話が推進されることになる。この場合、双方が相手のことを思いやっていることを言挙げせずに、あくまでも土産をめぐって言語の交話的機能が発揮展開される言語技術(金田一1955, 沖1999)が必要とされる。

8. 日韓中の依頼談話にみる発想と表現

次に、「指導教員に推薦状を書いてもらう」談話の特徴について、以下、韓国、中国、日本の依頼談話にみる発想と表現を比較し、特に日本語談話と異なっている点に注目して日本語談話の特徴を観察したい。依頼談話においては、言語化される表現とされにくい表現とが、各国の談話ごとに異なることが指摘できる。このことにも、依頼という言語コミュニケーションに対する価値観の異なりが反映しているが、詳細については別稿を期したい。

韓国では、「月曜日は私が学校に来ないんですけど、先生、火曜日に取りにきたらダメですか?(월요일은 제가 학교에 안 오는데, 교수님 화요일 찾으러 오면 안될까요?)」などのように、自分の都合を直接言い表すことが多い。また、「よろしくお願いします」に相当する形式的な表現を使うことが少なく、「先生、ありがとうございます」に相当する表現を使用する。入退室の際も、「失礼します」「よろしくお願いします」に相当するような、定型的なあいさつは表れにくい(以上、姜執筆部分を要約)。

中国では、「先生、奨学金の申請が始まりました。論文の提出を除いて、指導教師に推薦状を書いていただかなければなりません。(老师, 奖学金的申请已经开始了。除提交论文外, 还需要指导老师的推荐信。)」などのように、たとえ事前のアポイントメントをとる段階で説明がなされていたとしても、依頼理由を再度その場で明示的に述べる必要があるとされる。また、その場合、忙しい相手を煩わせるに足る理由であることが伝わるように述べるのが肝要である(以上、趙執筆部分要約に加筆)。

日本では、「推薦状の執筆を依頼したい」ということ自体は言語化されるが、その具体的な依頼内容や理由は、敬意を払うべき相手に対しては特に、依頼者の側が積極的に言語化することを控える傾向にある。依頼者が言語表現を控えている内容に対して、もう一方の談話参与者である被依頼者の側は推論を働かせ(=気遣いし)、また、必要であれば質問等の手段

によって依頼者の言語化を許し、その希望を正確に把握する言語行動が必要とされる。つまり、希望内容を言語化しない依頼者と、それに対して希望内容を正確に推論する被依頼者の、両者の言語行動の調和のなかに信頼関係が生まれる談話が推進されていく。このとき、依頼者の側の言語技術は、被依頼者が推論しやすいような状況を整えていくところに求められる。ここにみる「(大学で学生が) 指導教員に推薦状を書いてもらう」という定型的慣習的行為の依頼については、依頼者の側はその話題を提示し、必要書類を整えて携行し、相手の質問を待つだけで十分である。もし、依頼者が談話開始時に依頼内容の細部や理由の正当性まで言語化して要求すれば、話種は「依頼」から「指図」に移行し、円満な依頼言語行動にはなりにくい場合がある。談話ではなく文章による依頼の場合には、どこまでをいつ言語化するか、判断がさらに難しい。

9. おわりに

本論では、作例談話資料を通じて、韓国語談話、中国語談話と比較対照することにより、日本語談話の特徴を捉えるための試みを述べた。以下、分析のあらましをまとめておく。

「旅先で買った小品を同僚に渡す」という日本語申出談話においては、「土産」と呼ばれる小品は相手への気遣いの象徴として機能し、小品を糸口として交話的談話が推進されていた。日本語談話は、心情を共有する言語コミュニケーションを前提としていることが窺われる。韓国語談話では、訪問自体が目的となる言語コミュニケーション文化があるうえ、「膳物」と呼ばれる小品は黙って置くことが礼儀である伝統的慣習も手伝い、小品は話の糸口として機能しにくいことが指摘された。また、中国語談話では、小品は「礼品」「礼物」と呼ばれ、相手の世話に対する現実的対価の表現として機能しており、それが伝わる言語技術が必要とされていることが知られた。

「指導教員に推薦状を書いてもらう」という依頼談話においては、依頼自体は提示するが、具体的な依頼内容や理由についての言語化を控えることが日本語談話の特徴であり、それらを正確に推論し把握することが被依頼者に期待されていた。依頼者と被依頼者それぞれに異なる言語技術が求められていることが指摘できる。韓国語談話では、依頼者は感謝表現を選択しており、自己都合は率直に言語化される。中国語談話では、相手を煩わせるに足る理由があることを述べるのが期待されていた。

【付記】 本研究は、平成19～22年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C）「日本語的発想と表現との関係に関する対照談話論的研究」（課題番号19520389研究代表者沖裕子）に基づく成果の一部であることを記し、謝意を表する。

【参考文献】

- 井上優（2005）「学習者の母語を考慮した日本語教育文法」野田尚史編『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 沖裕子（1999）「チャレンジコーナー」『月刊言語』第28巻第2号 大修館書店（沖2006所収）
- 沖裕子（2006）『日本語談話論』和泉書院
- 沖裕子（2007）「談話論からみた方言と日本語教育」『日本語教育』134号 日本語教育学会

- 沖裕子 (2008) 「談話論からみた「文」と「発話」」 串田秀也・定延利之・伝康晴編 『「単位」としての文と発話』 ひつじ書房
- 沖裕子 (2009) 「発想と表現の地域差」 『月刊言語』 第38巻第4号 大修館書店
- 沖裕子 (印刷中) 「方言談話論の対象と方法」 小林隆・篠崎晃一編 『方言の発見—知られざる地域差を探る—』 ひつじ書房
- 姜錫祐 (2007) 「韓国人と日本人のコミュニケーション行動に関する比較対照研究」 『日本語学研究』 第19輯 韓国日本語學會, ソウル
- 姜錫祐 (2009) 「韓国語における敬語運用と変化の動向—圧尊法と呼称表現を中心に—」 『第23回社会言語科学会発表論文集』 社会言語科学会
- 金田一春彦 (1955) 『話し言葉の技術』 (1977年, 講談社学術文庫所収)
- 多田道太郎 (1972) 『しぐさの日本文化』 筑摩書房 (1978年, 角川文庫所収)
- 趙華敏 (2007) 「「慰める」「説得する」という言語行動に関する一考察」 『日本語と中国語と—その体系と運用』 学苑出版社, 北京
- 趙華敏 (2009) 「日本語と中国語の「好まれる言い方」について」 沈力・趙華敏主編 『漢日理論語言学研究』 学苑出版社, 北京
- 西尾純二 (1998) 「マイナス待遇表現の表現スタイル—規制される言語行動をめぐって—」 『社会言語科学』 第1巻第1号 社会言語科学会
- 西尾純二 (2001) 「マイナスの敬意表現の諸相」 『日本語学』 第20巻第4号 明治書院
- 西尾純二 (2008) 「言語行動の多様性に関する研究の射程」 『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』 桂書房
- 西尾純二 (2009) 「再検討・日本語行動の地域性」 『月刊言語』 第38巻第4号 大修館書店
- ネウストプニー, J.V. (1982) 『外国人とのコミュニケーション』 岩波書店
- 三宅和子 (1994) 「感謝の対照研究 日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動」 『日本語学』 第13巻第8号 明治書院
- 由井紀久子 (2005) 「書くための日本語教育文法」 野田尚史編 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 くろしお出版

(2009年11月9日受理, 11月24日掲載承認)